

第一志望の大学に入学できなかった大学生における Benefit Finding¹

上野 実希恵・安居 元紀・石崎 和也・杉村 和美

Benefit finding among university students who went to a university that was not their first choice.

Mikie Ueno, Genki Yasui, Kazuya Ishizaki and Kazumi Sugimura

Benefit finding describes the process in which people who experienced negative events found a positive meaning after reevaluating the experience. The purpose of this study is to reveal, using the concept of benefit finding, the sequence of processes that lead to meaning-making and personal growth, while taking in consideration the specific negative event and its context. To achieve this purpose, we examined the benefit finding of university students who went to a university that was not their first choice.

In study 1, we classified the sample who engaged in benefit finding in university entrance exams. Through cluster analysis of the scale for perception of university entrance exams for university students ($N=127$), three clusters were identified: passive attitude (Group 1); positive and negative perceptions (Group 2); and positive perceptions (Group 3).

In study 2, we conducted semi-structured interviews about awareness over the university entrance exams with university students who attended a university that was not their first choice and belonged Groups 2 or 3, and respondents who answered that they gained awareness during university entrance exams ($N=8$). The results of the thematic analysis revealed that participants in study 2 acquire two benefit findings, “Acquisition of personal skills for growth through teacher or parental support” and “Acquisition of new perspectives through comparisons between classmates’ and their own university exam experiences”.

These studies provide clinical and educational implications for helping students who unwillingly enroll in their university.

キーワード : benefit finding, university entrance exams, thematic analysis

¹ 本論文は、第1著者の修士論文を、第1著者と第2著者が再分析し、著者全員でその結果を確認、検討したものである。

問 題

人は時に、強いストレスを伴うようなネガティブなイベントを経験する。ネガティブな経験をした時に、抑うつや無気力といった不適応状態になることもあれば、その経験をきっかけに肯定的な成長を遂げることもある (堀田・杉江, 2013)。その一方で、ネガティブなイベントに意味づけや捉え直しをすることによって、不適応状態から立ち直り、人生の糧にすることができる。

ネガティブなイベントは、自己にとっての重要性が高いほど、その経験に対して肯定的意味が付与されやすい (Watanabe, 2017)。しかし、「自己にとっての重要性」というのは本人の基準によるものであり、人生において誰でも経験しうるようなネガティブなイベントも含まれる。青年期においては、友人関係、家族などに関するネガティブなイベントを経験したのち、ポジティブな意味の捉え直しや自己成長が見られることが明らかになっている (松下, 2008)。また、ネガティブなイベントに対する意味づけや自己成長の種類は、ネガティブなイベントの生起する文脈によって異なる。実際、ネガティブイベント全体 (例：失恋、試合に負けたこと) に対しては「自己の成長に対するポジティブな意味の付与」という意味づけを行っていたのに対し、教育的なネガティブイベント (例：大学受験の失敗) では、「自己の成長に対するポジティブな意味の付与」に加えて「温かい人間関係の再認識」の意味づけを行っていたことが明らかになっている。このように、イベントの質的な差異によって、得られる意味づけの種類が異なることも明らかになっている (渡邊, 2020)。よって、本研究においては、特定のネガティブなイベントに着目し、先行研究より詳細なネガティブイベントとその文脈を考慮しつつ質的な検討を行うことで、意味づけや自己成長に結びつけていくプロセスを明らかにする。本研究では、多くの青年が経験しうる重要なライフイベントである、大学受験を取り上げる。そして大学受験を経験した大学生の中でも、大学受験をネガティブにとらえていると推測される、第一志望に合格できなかった大学生に着目する。

日本の大学の現役進学者は 50%を超えており (文部科学省, 2021)、高校受験と合わせるとほとんどの青年が受験を経験する。一方で、大学受験に失敗したと思っている人は 42%と報告されており (ベネッセ教育総合研究所, 2021)、青年にとって受験は身近であるが、第一志望に進学できなかった青年や、自身の大学受験を失敗ととらえる青年は珍しくないことが推察できる。また、受験の失敗は学力の劣等性を自覚させ、自らの存在価値を脅かすほどの力を持っている (櫻井, 2009)。したがって、第一志望に合格できなかった青年に焦点を当てることは本研究の目的に沿っていると考えられる。

Benefit Finding

ネガティブなイベントに対する意味づけや自己成長に関する研究は、様々な研究領域で行われている。認知心理学の領域では、複数の過去の経験から自己省察的な思考や語りを引き出し、出来事と自分を結び付ける思考過程である、自伝的推論がある (Habermas & Bluck, 2000)。また、ナラティブアイデンティティの領域では、ネガティブなイベントに対して肯定的な意味づけを行った語り手は、Well-being などの精神的健康や幸福をより高いレベルで実現していることが分かっている

(McAdams & McLean, 2013)。心的外傷後成長 (Posttraumatic Growth) の研究領域では、トラウマ的な出来事を経験した後に、自己や他者、出来事自体に対しての認識を再構築し、肯定的な成長をすることが知られている (Tedeschi & Calhoun, 1996)。同じくトラウマの領域からは、出来事の中心性という概念が提唱されている。出来事の中心性は、その出来事がどれだけ自己にとって大きな出来事であったかを指しており、ネガティブなイベントの記憶が、①日常的な推論の参照点になる、②ライフストーリーの転機となる、③アイデンティティの中心に位置づくという 3 つの機能を果たすとされている (Berntsen & Rubin, 2006)。

上記のように、ネガティブなイベントに対する意味づけや自己成長に関する研究は、様々な研究領域で行われている中、本研究では Benefit Finding (以下、BF) という概念を用いることとする。BF は、過去のネガティブな経験を再評価し、その経験に新しい意味づけをおこなうことを指す (Gao et al., 2014)。BF は新たな意味づけをすることで精神的健康の回復や自己発達に貢献するが、ただ意味づけをするのではなく、その意味が肯定的であることが特徴として挙げられる (渡邊, 2020)。また、BF はポジティブ心理学の領域の概念であり、出来事の有益な特質に焦点を当てることで、ネガティブな効果を最小限に抑える (Tennen & Affleck, 2001)。BF は、日常的な過去のネガティブなイベントを対象とし、新たに肯定的な意味づけを行うという点において、思考過程である自伝的推論や、心理的変容経験である心的外傷後成長とは異なっている。また、青年の BF については、青年が両親の離婚や、受験や部活でのネガティブな経験などから肯定的意味を見出すことで、アイデンティティ達成に繋がるということが報告されている (渡邊, 2020)。このように、BF は、日常的な過去のネガティブな経験を再評価し、新しく肯定的な意味づけを行う点、そして青年が BF を行うことでアイデンティティ達成につながるという点で、本研究の対象である第一志望に合格できなかった大学生に着目するうえで適した概念であると考えられる。

したがって本研究の目的は、特定のネガティブなイベントとその文脈を考慮しつつ、そのイベントの意味づけや自己成長に結びつけていくという一連のプロセスを、BF の概念を用いて明らかにする。この目的を達成するため、大学生の中でも、大学受験をネガティブにとらえていると推測される、第一志望に合格できなかった大学生に着目し、彼らの BF を質的に検討する。

研究 1

目 的

研究 1 では、現時点で大学受験を肯定的にとらえている大学生は、大学受験を通して肯定的な気づきを得ていることを確認する。ここでは、大学受験に対するとらえ方と気づきの関連を広く検討するため、BF ではなく、気づきという言葉を用いる。気づきは、BF と違って、ネガティブな経験を必要としない。堀井 (2017) は、大学受験に対し、“肯定・積極群”、“半肯定・消極傾向群”、“否定・消極群”、“大学受験無関心群”の 4 群に分かれると報告しており、この中の“肯定・積極群”は、大学受験を自分の成長や現在および未来につながる経験としてとらえている群である。したが

って、研究1では、次の2つの仮説が考えられる。①大学受験のとらえ方は4群に分かれる。②4群のうち現時点で大学受験を肯定的にとらえている群は、大学受験を通して気づきを得ている。

方 法

調査時期および調査対象者 2022年10月—12月に、関西地方の私立大学の文学部生および、中国地方の国立大学の教育学系の計127名(男性36名、女性89名、その他・不明2名：年齢19—24歳、平均年齢20.20歳、 $SD = 0.89$)を対象に実施した。

質問項目 (a) 大学受験に関する属性を問う項目：千島・水野(2015)を参考に、現在所属している大学・学部が第一志望か否かについて「はい」もしくは「いいえ」のどちらかを選択してもらい、回答を求めた。また、堀井(2019)を参考に、入試形態(一般・AO・推薦・その他)と浪人の有無についても選択式での回答を求めた。

(b) 大学受験のとらえ方尺度：現在、大学受験を本人がどうとらえているのかについて、堀井(2017)の大学受験のとらえ方尺度を用いた。「連続的などらえ」「否定的態度」「受容的態度」「わりきり態度」「否定的認識」の5因子24項目で構成されている。「連続的などらえ」8項目は「大学受験は自分を成長させてくれた」等、大学受験を自分の成長や現在・未来に繋がる経験としてとらえていることを表す。「否定的態度」3項目は「大学受験を後悔している」等、大学受験に対する後悔を表す。「受容的態度」3項目は「大学受験での出来事すべてに、意味があると思っている」等、大学受験に対する受容的な態度を示す。「わりきり態度」4項目は「大学受験でのマイナスな出来事は忘れてしまうことが多い」等、大学受験を忘れようとするような態度を表す。「否定的認識」は「自分の大学受験はマイナスな出来事ばかりだった」等、大学受験に対する否定的な認識を示す。自分自身の現在の大学受験のとらえ方がどの程度あてはまっているのかについて、5件法(1. 全くあてはまらない, 2. あまりあてはまらない, 3. どちらともいえない, 4. ややあてはまる, 5. とてもあてはまる)で回答を求めた(連続的などらえ, 否定的態度, 受容的態度, わりきり態度, 否定的認識それぞれについて, $\alpha = .88, .83, .71, .48, .80$)。

(c) 大学受験を通して気づきがあったかを問う項目：山根(2014)や、千葉他(2010)を参考にし、「大学受験を経験した人の中には、その経験から得られたものがあると感じる人がいます。例えば、ある人は自分の成長を感じたり、人間関係について気づきを得たりしています。あなたは、自分の大学受験の経験から、何か自分なりに得られたものがあると感じていますか。」について、「はい」と「いいえ」で回答を求めた。

倫理的配慮 広島大学の倫理委員会の倫理審査の承認を得て本研究を実施した。回答途中にも回答や同意を撤回することができること等を、紙面および口頭で説明し、同意が得られた場合のみ参加してもらった。

結果と考察

大学受験のとらえ方尺度の相関分析を行った結果を Table 1 に示す。また、「否定的認識」の項目の 1 つである「大学受験は否定的なイメージである」は、著者のミスにより質問紙から除外されたが、「否定的認識」の α 係数 ($\alpha = .80$) が高いことや、確認的因子分析の結果から問題がないと判断した。

大学受験のとらえ方について、大学受験のとらえ方尺度より 5 因子の標準化得点を変数とし、参加者 127 名を対象にユークリッド距離の二乗を用いたクラスター分析 (ウォード法) を行った。その結果、4 クラスターであると 1 つのクラスターが 9 人と、全体人数の 10% を切るクラスターが算出されたため、3 クラスターを適当とした。各クラスターの特徴を Figure 1 に示す。第 1 群は、「わりきり態度」が高いため、大学受験をわりきってとらえている “わりきり群” と命名した。“わりきり群” は 59 名だった。第 2 群は、「否定的態度」が最も高く、「否定的認識」も高い。しかし、「連続的なとらえ」と「受容的態度」も高いため、大学受験を否定的にも肯定的にもとらえている “否定・肯定群” と命名した。“否定・肯定群” の人数は 37 名であった。第 3 群は、「連続的なとらえ」と「受容的態度」が高いため、大学受験を肯定的にとらえている “肯定群” と命名した。“肯定群” は 31 名であった。

さらに、大学受験のとらえ方における “わりきり群”， “否定・肯定群”， “肯定群” を対象に、大学受験を通して気づきがあるかどうかを尋ね、カイ二乗検定で分析した結果、有意な偏りが見られた ($\chi^2(2) = 28.68, p < 0.01, effect\ size\ w = 0.48, power = 0.10$)。調整された残差の検定 (1% 水準, 片側検定) によると, “わりきり群” の「気づきがある」と答えた人数が期待度数よりも有意に少なく, “否定群” の「気づきはない」の人数が期待度数よりも有意に多かった。また, “否定・肯定群” の「気づきがある」と答えた人数は期待度数よりも有意に多く, “否定・肯定群” で「気づきはない」の人数は期待度数よりも有意に少なかった。さらに, “肯定群” の「気づきがある」と答えた人数は期待度数よりも有意に多く, 「気づきはない」の人数は期待度数よりも有意に少なかった (Table 2)。

Table 1

大学受験のとらえ方尺度の記述統計と相関

変数	<i>M</i>	<i>SD</i>	1	2	3	4	5
1 連続的なとらえ	3.64	0.80	—				
2 否定的態度	1.99	0.99	-.12	—			
3 受容的態度	3.29	0.92	.75*	-.16 ⁺	—		
4 わりきり態度	2.79	0.73	-.31**	-.06	-.33**	—	
5 否定的認識	2.24	0.83	-.13	.45**	-.18*	-.04	—

** $p < .01$, * $p < .05$, ⁺ $p < .10$

Figure 1

大学受験のとらえ方のクラスター群

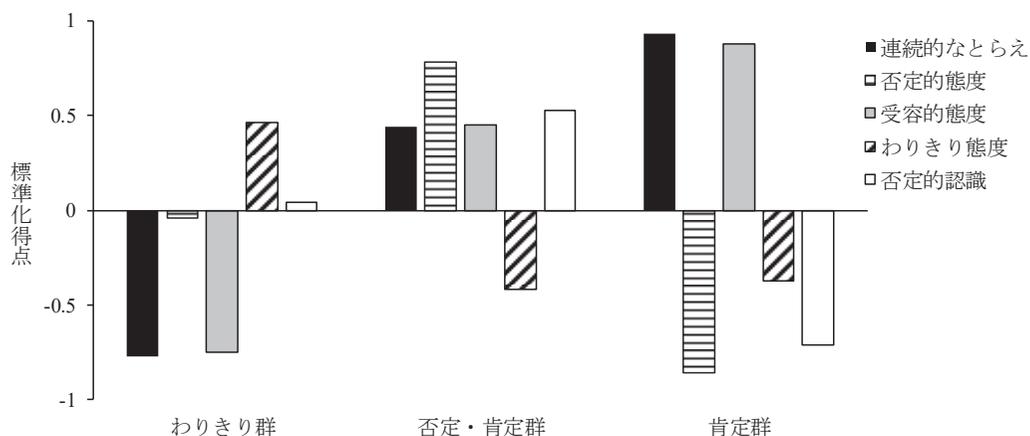


Table 2

大学受験のとらえ方に対する気づきの有無

大学受験のとらえ方	気づきがある 度数 (%)	気づきがない 度数 (%)	合計 度数 (%)
わりきり群	27 (21.26) ASR = -5.35*	32 (25.20) ASR = 5.35*	59 (46.46)
否定・肯定群	33 (25.98) ASR = 3.12*	4 (3.15) ASR = -3.12*	37 (29.13)
肯定群	28 (22.05) ASR = 2.92*	3 (2.36) ASR = -2.92*	31 (24.41)
合計	88 (69.29)	39 (30.71)	127 (100)

注) ASRは標準化残差。* $p < .01$

大学受験のとらえ方におけるクラスター群について、研究1の①の仮説は4群としていたが、本研究の分析の結果、3群となったため、仮説は支持されなかった。また、大学受験を肯定的・受容的にとらえている“肯定群”に加え、大学受験を否定的にも肯定的にもとらえている“否定・肯定群”も、大学受験を通して肯定的な気づきを得ていることが分かった。したがって、研究1の②の仮説は支持された。

研究 2

目 的

研究 2 では、第一志望の大学や学部に進学できなかった経験をネガティブな経験とし、第一志望の大学・学部に進学できなかった大学生が行った BF についてテーマ分析 (Braun & Clarke, 2006) を行う。第一志望の大学・学部に進学できなかった大学生が行った BF についての先行研究は存在しないため、研究 2 は探索的な検討となる。しかし、教育的なネガティブイベントにおける BF に関する先行研究 (Watanabe, 2017) では、ネガティブなイベントを中心とするアイデンティティと「自己の成長に対するポジティブな意味の付与」と「他者の温かさの認識」という 2 つの BF との関連が明らかとなっている。そのため、大学受験における失敗という教育的ネガティブなイベントを扱う本研究においても、同様の BF がテーマとして抽出されると予測される。

方 法

調査時期および調査対象者 BF の定義「過去のネガティブな経験を再評価し、その経験にポジティブかつ、新しい意味づけを行うこと」に合致する面接対象者として、研究 1 で「気づきがある」と回答した“否定・肯定群”と“肯定群”の中で、第一志望の大学・学部に進学できなかった大学生を抽出した。“わりきり群”については、クラスター分析において、「連続的などらえ」、「受容的態度」といった項目の得点が低かった。よって、大学受験に対してポジティブな意味づけを行っていない点で、BF の定義に合致しない者として、面接対象者から除外した。“否定・肯定群”と“肯定群”の中で面接調査に同意した、関西地方の私立大学の文学部生および、中国地方の国立大学の教育学系の計 8 名(男性 3 名、女性 5 名：年齢 20—21 歳、平均年齢 20.50 歳、 $SD = 0.5$)を対象とし、調査を 2022 年 12 月に実施した。参加者の基本情報について、Table 3 に示した。

Table 3

面接参加者の基本情報

参加者	年齢	性別	進学先	進学先入試形態	浪人経験	大学受験のとりえ方
A	21	女性	私立大学文学部	指定校推薦	なし	否定・肯定群
B	21	男性	私立大学文学部	一般入試	なし	否定・肯定群
C	20	男性	国立大学教育学系	一般入試	なし	肯定群
D	21	女性	国立大学教育学系	一般入試	あり	否定・肯定群
E	20	男性	国立大学教育学系	一般入試	なし	肯定群
F	20	女性	国立大学教育学系	一般入試	なし	否定・肯定群
G	20	女性	私立大学文学部	内部進学	なし	否定・肯定群
H	21	女性	国立大学教育学系	一般入試	なし	否定・肯定群

調査手続き 調査者と調査対象者が1対1で、半構造化面接を実施した。インタビューはオンライン上で行い、事前に許可を得て内容を録音した。調査に用いた時間は35分～50分程度であった。

質問項目 山根 (2014) や、千葉他 (2010) を参考にし、「大学受験を経験した人の中には、その経験から得られたものがあると感じる人がいます。例えば、ある人は自分の成長を感じたり、人間関係について気づきを得たりしています。あなたは、自分の大学受験の経験から、何か自分なりに得られたものがあると感じますか。」と教示した。

分析方法 テーマ分析 (Braun & Clarke, 2006) を用いた。逐語録からBFの定義を踏まえて第1著者と第2著者が重要であると判断した語りをコード化し、意味の近いコードをサブテーマとしてまとめ、主テーマを生成した (Table 4)。また、Braun & Clarke (2006) の方法に則り、普及率と重要度を加味してテーマ、サブテーマを抽出した。

結果と考察

テーマ分析の結果、2つの主テーマが生成された。以下、主テーマを<>、サブテーマを【】で示す。主テーマは、<先生、親といった年長者のサポートを経て、自己成長を促す力を獲得した><同級生の受験経験と自身の受験経験を比較して、新たな視点を獲得した>の2つが生成された。テーマ分類の妥当性は、筆者と共著者3名によって確認された。得られたテーママップを Figure 2 に示す。

<先生、親といった年長者のサポートを経て、自己成長を促す力を獲得した>

この主テーマの参加者は、大学受験では第一志望の大学に入学することはかなわなかったが、受験勉強を進める過程で自己成長を促す能力を獲得した。この主テーマは【先生や親のサポートを受けつつ受験を乗り越え、精神的な忍耐力を獲得した】【先生や親の情動的なサポートを経て受験を乗り越え、実用的なスキルを獲得した】という2つのサブテーマより抽出された。BFに関する先行研究 (渡邊, 2020) では、BF項目に「ありのままの受容と自己成長」という因子が存在しており、ネガティブなイベントから精神的な自己成長を促す項目が設定されている (例：「この出来事は、私のこころを強くし、今後の困難に対してより効果的に対処できるようになった」)。本研究では、このような精神的な自己成長に関する【先生や親のサポートを受けつつ受験を乗り越え、精神的な忍耐力を獲得した】というBFに加え、【先生や親の情動的なサポートを経て受験を乗り越え、実用的なスキルを獲得した】といった受験後の日常生活に直結するような、自己成長を促す力についてのBFが抽出された。加えて本研究では、語りの中で双方のサブテーマにおいて、「先生や家族といった年長者のサポートがあったからこそ、<自己成長>の感覚を得た」という文脈に着目する。

Table 4

コード,サブテーマ,主テーマ抽出の例

語り(一部を抜粋)	コード	サブテーマ	テーマ
受験の最中、後期日程のその受験するまでは試験の当日まではもう頑張ることで精一杯だったので、もうとにかく突っ走っていたという感じなんですけど、終わった後に振り返る時間があるので振り返ったときに、何でこんなに頑張れたんだろうっていう、気づきがあって、それから先生とかのサポートもあったっていうことも振り返りつつ、やっぱり自分の中の精神面の強さが、精神的により強くなれたのかなっていうふうに感じました。(Hさん)	コード1:受験中は頑張ることで精いっぱい。終わった後ではじめて受験経験を振り返った コード2:先生とかのサポートもあった コード3:精神的に強くなった	先生や親のサポートを受けつつ受験を乗り越え、精神的な忍耐力を獲得した	先生、親といった年長者のサポートを経て、自己成長を促す力を獲得した
センター試験の結果も踏まえながら予定をまともていくという力がかなり身についたと思います。これは自分1人の力じゃなくて、自分は苦手だったので元々。なんで、家族の助けを得ながらそういうことをやってきました。(Bさん)	コード1:試験結果を踏まえながら予定をまともていく力が身についた コード2:家族の助けを得ながらやっていた	先生や親の情動的なサポートを経て受験を乗り越え、実用的なスキルを獲得した	上記のテーマと同様
入学当初はこの人頭いいとか、めっちゃ勉強ができるなって思ってたわけじゃない人たちが、医学部だったり良い大学に入ったりしてて。それを見て、中学生のときとかはそんなに思わなかったんですけど、高校に入ったときに、こんなにこの人はできるんだとか、こんなに頑張ってきたんだみたいな、私が知らない間にちょっとずつやってきてたんだなっていうのを感じました。(Fさん)	コード1:もともと勉強ができたわけではない同級生がよい大学に合格した コード2:同級生が知らない間に努力していたと感じた	同級生の努力を知って、努力の大切さを認識した	同級生の受験経験と自身の受験経験を比較して、新たな視点を獲得した
自分と比べてできないことがある人、スポーツ、勉強が苦手だとか、会話が苦手だとかいう人に対して、大学受験以前は、心の奥の奥の方で、何でできないんだみたいな見下した部分があったんですけど。大学受験後っていうのは、それはなくて。得意不得意があるよなって。この人ができないことは僕がすればいいし、僕にできないことはしてもらおうっていう気持ちで人と向き合っているっていうのは活きているな、と思います。(Eさん)	コード1:大学受験以前は自分よりできない人を見下していた コード2:大学受験後に人には得意不得意があると思うようになった コード3:僕にできないことはしてもらおうと思うようになったのはのちの生活に活きている	同級生の努力を知って他者を見下す姿勢から、得意不得意を尊重する姿勢へと変化した	上記のテーマと同様
自分は勉強が好きだからやっているだけで、別に嫌だったらしてないというふうな。何で自分が勉強してるのかっていうふうな思ったときに、大学に合格したいっていうふうな思いもちょっとあったんですけど、それよりかは面白からやってるっていうのがやっぱり大きくて。そういう点で好きなことをするっていうふうな。嫌なことはしないっていうふうなことは、自分が勉強好きだったということと、周りで勉強嫌いな人がいたっていうふうな両方のところから得たと思っています。(Cさん)	コード1:勉強は好きだからやっているだけ、いやだったらしてない コード2:大学受験に合格したいというよりも勉強が面白くてやっていた コード3:周りで勉強嫌いな人がいたからこそ、自分が勉強を好きなんだと思うようになった	同級生の受験に取り組む姿勢を見て、勉強への新たな動機づけを発見した	上記のテーマと同様

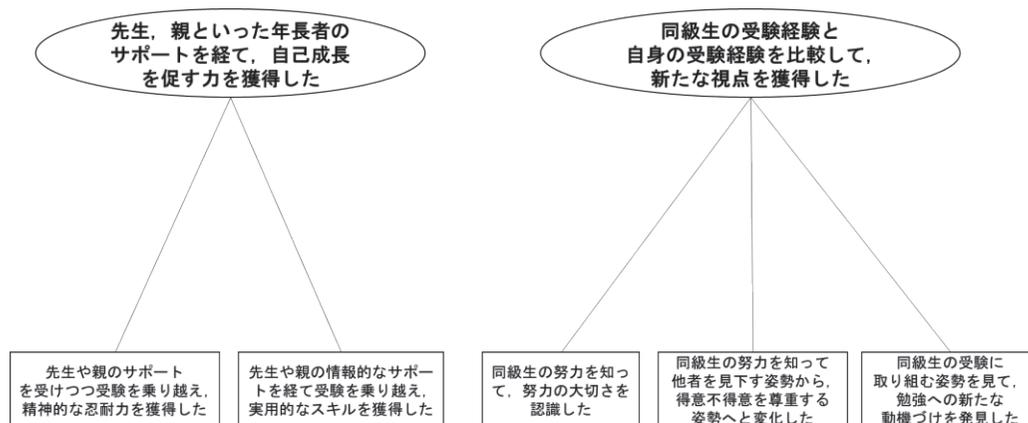
【先生や親のサポートを受けつつ受験を乗り越え、精神的な忍耐力を獲得した】

このサブテーマの参加者は、第一志望に入学できなくとも、先生や親のサポートを受けながら受験を乗り越え、大学に入学した経験を振り返り、大学受験において【先生や親のサポートを受けつつ受験を乗り越え、精神的な忍耐力を獲得した】をしたというBFを得た。以下、上記の過程を代表するBさんとHさんの語りを示す。

大学入試っていうので、3ヶ月以上続く経験を何とか乗り越えることができた。それに関して、精神的にはその持久力ですね、そういったものを見つけることができたんじゃないかなというふう

Figure 2

テーマ分析のテーママップ



に思います。何があっても、最後は自分も勉強してきたからもう大丈夫なんだっていう、自信にもそれは繋がったんじゃないかなって思います。(中略) もちろん11月と1月でも結構入試に落ちてきたんですけど、それでもなんかいろいろね、入試っていうのが本当に3月下旬まで続くって高1か高2のときに、進路指導部長の先生とか担任から言われてきたことなんで。3月まで続くから、それまでは諦めずに、今取り組んでほしいという言葉が、本当に自分の心の中に入ってきてるんじゃないかなって思います。その言葉があったからこそ、ある程度続けることができたっていうのはあります。なんとか2月10日ぐらいに初めての合格が出たんですけど、そこまでその言葉であったり、家族のサポートがあったからこそ、その持久力を維持できたっていうことはあります。(Bさん)

Bさんは「11月と1月でも結構入試に落ちてきたんですけど」(前項の語りを参照)と、自身の不合格経験に言及しつつも、「3月まで続くから、それまでは諦めずに、今取り組んでほしいという言葉」や先生の情緒的なサポート(Cronenwett, 1985)に励まされつつ、3月まで受験を継続し、「なんとか2月10日ぐらいに初めての合格が出た」経験を語った。Bさんは、その経験に対して、「精神的な持久力」が身についたというポジティブな意味のとらえ直しを行っている。次にHさんの語りを示す。

最後まで諦めずに頑張る力、特に精神面においてそのような力が得られたかなと感じています。自分は前期日程が不合格で、後期日程で1大学に入学したんですけど、友達もいない中で学校で1人で勉強したりとか、あとはそれまでに受かっている大学が一つもなかったのがかなり精神的にきつかったんですが、なんとか頑張れたので、最後まで本当の意味で諦めずに頑張る力が身についたのかなと思います。(中略) 受験の最中、後期日程のその受験するまでは試験の当日まではもう頑張ることで精一杯だったので、もうとにかく突っ走っていたという感じなんですけど、終わった

後に振り返る時間があるので振り返ったときに、何でこんなに頑張れたんだろうっていう、気づきがあって、そこから先生とかのサポートもあったっていうことも振り返りつつ、やっぱり自分の中の精神面の強さが、精神的により強くなれたのかなっていうふうに感じました。(Hさん)

Hさんは、前期日程で第一志望の大学が不合格であり、「友達もいない中で学校で1人で勉強」や「それまでに受かっている大学が一つもなかった」といった「精神的にきつい」経験について言及しつつも、最終的には後期日程まで受験を継続し、現在の大学へ入学することが出来た経験を振り返った。Hさんはこの経験から、「最後まで諦めずに頑張る力」を獲得したというポジティブな意味のとらえ直しを行っている。また、Hさんが上記の語りで言及した先生のサポートについては以下の語りにおいて詳細に言及されている。

自分が行きたかった学科にはどうしても自分のセンターの結果とかでちょっと難しく、後期に受ける大学どうしようかっていうところから悩んでいたんですけど、先生がこのコースは自分が行きたいコースじゃないかもしれないけど、I大学だったら副専攻で学べたりするよとか、そういう新しい選択肢をたくさん見つけ出してくれたりとか。後期受験の日程は小論文だったので、また1から勉強し直してみたいな感じだったんですけど、過去問を集めてくれたりとかして結構マンツーマンで教えてくださったので、そういうサポートがすごくありがたかったなっていう感じです。(Hさん)

上記の語りのように、Hさんは「最後まで諦めずに頑張る力」を獲得するにあたって、受験先の新しい選択肢を見つけ出す、小論文の過去問を集めてマンツーマンで添削をするといった情動的なサポート (Cronenwett, 1985) があったことを振り返り、先生に対して感謝の念を持った。

BさんとHさんは共通して、大学受験において失敗した面やその精神的な負担を感じながらも、先生や家族のサポートを受けつつ後期入試まで勉強に励み続け、最終的には大学に合格して受験を乗り越えることができた経験を振り返っている。そしてその経験から、大学受験で「精神的な忍耐力の獲得」というポジティブな意味のとらえ直しを行っていた。上記の語りは、第一志望に入学できなかった経験をもつ大学生が、第一志望に入学することはできずとも、最後まで受験を続けて大学に入学した経験と、その過程で先生や親といった年長者のサポートを受けた経験を参照することで、「精神的な忍耐力の獲得」という受験に対してポジティブな意味のとらえ直しに結びつけるプロセスを示唆するものである。

【先生や親の情動的なサポートを経て受験を乗り越え、実用的なスキルを獲得した】

このサブテーマの参加者らは、第一志望への入学を断念したのち、第一志望への合格という目標とは別に、自分の進路の実現という目標を持ち、情報収集や受験の計画を立案し、現在の大学に合格した経験を語った。そして、自身の受験経験を振り返る中で、目標に向けて情報収集をする力や、計画を立てて行動する力が身に付いたというポジティブなとらえ直しの語りが見られた。渡邊

(2020) の BF 尺度「ありのままの受容と自己成長」の因子では、精神的な成長（例：この出来事は、私のこころを強くし、今後の困難に対してより効果的に対処できるようになった）と述べられており、本サブテーマのように、より具体的で実用的なスキルについては言及されていない。以下、大学受験において、情報を集めるスキルを培い、のちにそのスキルの大切さに気づいた F さんの語りを示す。

1 個は、情報ってすごく大切だなということを思って。受験は結構情報戦って、よく言う人もいると思うんですけど。なんかいろんな大学選びの段階からそうだと思うんですけど、模試の結果だったりとか、出願状況だったりとか、そういうのって結構大事だなと思って、それはこれから就活とか教採とかを受ける中でも役に立つんじゃないかなと思っています。（中略）私は教育学部なんですけど、取れる資格だったりとか、細かく調べていくと結構違いがあったりして。教育実習だったりとか、細かいところまで、意外と公開されてる情報であつても知らないことも多かったんで、志望校選びの段階でまずそういうことを思いました。あとはどれぐらい志願者がいるのかなっていうのを毎回共通テストの模試だったり、予備校の模試を受ける中で知っていく中で、何か結構役に立ったというか。自分、ここの志望校は、私は第1志望じゃなかったんで、志望校を前のまま、第1志望のままいくか、J大にするかってところで、共通テスト終わる前から悩んでいて、ここでいろんな情報を集める中で、多分第1志望の学校受けていたら浪人してたかなっていうのもあつて、自分の中では浪人したくないっていう思いがあつたので、自分が実現したい進路のために情報は大事かなと思いました。（Fさん）

Fさんは、第一志望から志望校を変更する過程で、模試の結果や出願状況、各々の大学で取得できる資格など、様々な側面から情報収集を行った。そして、Fさんはその経験をきっかけに、第一志望への合格という目標とは別に、現在の教育学系の大学に入学した経験を振り返り、受験に対して「自分が実現したい進路のために情報は大事」というポジティブなとらえ直しを行っている。また、「それはこれから就活とか教採とかを受ける中でも役に立つんじゃないかなと思っています」という語りから、Fさんが情報収集をする力が有益なものであると感じていることが読み取れる。

また、Bさんは「精神的な忍耐力の獲得」（前項の語りを参照）に加えて、「計画を立てて実行する能力」を得た経験について語っている。

私が大学受験を通して得られた力ですね、まず第1に、計画を立てて実行する力であつたり、自分で行動する力にあると考えています。私は将来、中学校の英語の教師を目指していたので、その教職課程って中学校高校一種免許状が取れる学部学科であつたり、先生の就職率がかなり高い大学を選んだりしていました。また大学を選んだ後、国公立の推薦入試、国公立前期後期をどこに受けるのかとか、あと私立の公募制推薦、一般方式であつたり、日程であつたりっていうのをどんどん調整をしていく力が本当に必要だなと感じました。（中略）センター試験の結果も踏まえながら予定をまとめていくという力がかなり身についたと思います。これは自分1人の力じゃなくて、自分

は苦手だったので元々。なんで、家族の助けを得ながらそういうことをやっていきました。(Bさん)

Bさんは、教師になるという目標のため、国公立・私立の複数の大学に様々な受験方式で出願し、さらにセンター試験の結果を鑑みつつ受験日程を決定していく経験について振り返った。その結果としてBさんは、「何とか2月10日ぐらいに初めての合格」を勝ち取り、「計画を立てて実行する力」を獲得した経験としてポジティブにとらえ直したと考えられる。

そして、Bさんが「自分1人の力じゃなくて、自分は苦手だったので元々。なんで、家族の助けを得ながらそういうことをやっていきました。」と語っていることにも着目しなければならない。Bさんは「計画を立てて実行する力」は家族にサポートを受けながら得た力であると語っている。この家族のサポートは、Bさんが計画を立てるうえでの具体的な助言であったことが推察されることから、ソーシャルサポートのうち、情報的なサポート (Cronenwett, 1985) であったと考えられる。この語りから、「実用的なスキルの獲得」は先生や家族といった、身近な年長者の情報的なサポートによって促進される可能性が示唆された。

Bさん、Fさんの語りを通して、大学受験という文脈では、精神的な成長を促すBFに加え、実用的なスキルの獲得を促すBFが重要視されていることが明らかとなった。そして、Bさんの語りから、実用的なスキルの獲得は、先生や家族といった身近な年長者からの情報的なサポートによって促進される可能性が示唆された。

<同級生の受験経験と自身の受験経験を比較して、新たな視点を獲得した>

この主テーマの参加者は、第一志望に合格できなかった大学受験の経験の中で、同時期に受験を行った友人、恋人、クラスメイトの受験経験と自身の受験経験を比較することによって、自身の受験経験を振り返り、今後の参加者にとって有益なBFを見出した。この主テーマは【同級生の努力を知って、努力の大切さを認識した】【同級生の努力を知って他者を見下す姿勢から、得意不得意を尊重する姿勢へと変化した】【同級生の受験に取り組む姿勢を見て、勉強への新たな動機づけを発見した】という3つのサブテーマより抽出された。BFに関する先行研究 (渡邊, 2020) では、BF項目に「新視点の獲得」という因子が存在しており、本研究においても先行研究とほぼ同様のテーマが抽出されたが、参加者が、同時期に受験を行った友人、恋人、クラスメイトとの比較を経て、新視点を獲得したという一連の過程があることを明らかにした点が新しい。

【同級生の努力を知って、努力の大切さを認識した】

このサブテーマの参加者は、第一志望に合格した同級生の努力を認めたくて、自身の努力不足を実感し、大学受験に対して、努力の大切さを認識した経験という意味づけを行っている。このサブテーマは6名の語りから得られたことから、大学受験の失敗を通して行われやすいBFであったと考えられる。努力の必要性に気づいたことについて、Fさんは以下のように語っている。

私はあんまり高校時代、勉強頑張らなかったので、すごく後悔しているというか、その教訓を込めて時間の積み重ねは大切だなと思いました。(中略) 入学当初はこの人頭いいとか、めっちゃ勉強ができるなって思ってたわけじゃない人たちが、医学部だったり良い大学に入ったりしてて。それを見て、中学生のときとかはそんなに思わなかったんですけど、高校に入ったときに、こんなにこの人はできるんだとか、こんなに頑張ってきたんだみたいな、私が知らない間にちょっとずつやってきてたんだなっていうのを感じました。(Fさん)

Fさんは第一志望に合格した同級生と自分の努力を冷静に比較し、自身の努力不足に後悔の念を持ちつつも、「努力の大切さ」に気づくことができた経験として新たな意味づけをしている。そして、Fさんは、努力の積み重ねの大切さに気づいたからこそ、「経験値の差が出るから」と、現在通っている大学で、ボランティアやアルバイトなどをはじめ、授業にも積極的に参加するようにしている。

第一線でやってるような大学に入ったとしても、その中で積み重ねられなかったら一緒だし。私は第2志望だったので、第2志望でもちゃんと時間を積み重ねていけば、全然そっちでも自分で学びを得られるんじゃないかなど。なので、そういう考え直すというか、どの環境でも、時間の積み重ねを大事にしていきたいなと思ってるんで、ちょっとずつ頑張れるようになったかなと思います。(Fさん)

上記の語りのように、Fさんは、受験という一連のネガティブな経験を「努力の大切さ」を認識したポジティブな経験としてとらえ直すことで、大学での積極的な学習の動機づけに繋がったと考えられる。

また、Eさんは、自身が受験に対して真摯に取り組まなかった一方で、友人や元恋人が努力をしていたことに気づき、強く内省している。

僕の周りの友達って、わりと受験期が差し迫っても一緒にゲームをしたりだとかっていうのがあったので、みんなこんなもんだろうと思ったりしてたんですけど。受験がみんな一通り終わった後でさりげなく聞いてみたら、いやゲームはしてたけど、めちゃくちゃちゃんと勉強してたぞみたいな話を結構聞いたりしたのもあって、みんなちゃんとやってたんだなっていうのは気づきましたね。

もちろんその話を聞いた友達の話がなければ気づかなかったことかもしれないなと思いますし、僕は高校のときに、当時付き合ってた彼女がいたんですけど、その子は真面目で、受験にも熱心に取り組んでたんですけど、僕は受験に向き合うのが嫌というか全然向き合えなくて。その子がどれだけ努力してるかみたいな、あんまり考えたことがなかった。(中略) 大学に2人入った直後ぐらいに別れ話をしたときに、受験期なのに、私はすごい真面目に頑張ってたけど、それを馬鹿にされてるような気がしてみたいな、そういう気持ちがあったみたいなの、話をされたときに、ちゃんと努

力してたんだし、自分はそれをなんか馬鹿にしてたんだなっていうことは感じましたね。(Eさん)

そして友人や恋人の努力に気づき、それを「馬鹿にしていた」ことを内省したEさんは、第一志望の大学に合格できなかった経験に対して、「努力の大切さ」という新たな視点を獲得した。

単純にやっぱ努力は必要なんだっていう、すごい当たり前のことですけど、それに実感することができたので、実際、大学での授業でテストとか、あと資格勉強とかするときっていうのは、その大学受験を経験する以前よりは明らかにちゃんと身を入れてというか、真面目に取り組むようになったなと思います。(Eさん)

上記のEさんとFさんの語りから、自分自身は第一志望に合格することができなかった一方で、第一志望に合格した同級生の努力に気づくことで自分自身の受験経験を内省し、その後に「努力の必要性」という新たな価値観を意味づけるという共通の過程が確認された。そして、「努力の必要性」という新たな価値観は、彼らの大学生活に有益な教訓をもたらしていると推測される。

【同級生の努力を知って他者を見下す姿勢から、得意不得意を尊重する姿勢へと変化した】

前項において語りを紹介したEさんは、第一志望の大学に合格できなかった経験から、【他者を尊重する姿勢】というもう一つのBFを得た。Eさんは受験の中で、「彼女の努力を馬鹿にしていた」「友人が自分の知らないところで努力をしていたこと」(前項の語りを参照)に気づいた。そしてEさんは、受験経験を経て、自分自身が「他者を見下す姿勢」から、「他者の得意不得意を尊重する姿勢」に変化したことを語っている。以下の語りはEさんの変化を示すものである。

自分と比べてできないことがある人、スポーツ、勉強が苦手だとか、会話が苦手だとかいう人に対して、大学受験以前は、心の奥の奥の方で、何でできないんだみたいな見下した部分があったんですけど。大学受験後っていうのは、それはなくて。得意不得意があるよなって。この人ができないことは僕がすればいいし、僕にできないことはしてもらおうっていう気持ちで人と向き合っているっていうのは活きているな、と思います。(Eさん)

また、Eさんは他者を尊重する姿勢の有益性について、以下のように語っている。

平たい言い方をすれば、いろんな人に優しく接することができるようになったっていうことだと思うので、ちょっと苦手なことに手間取ってる人とかに冷たい言葉をかけたりっていうことはないです。ただ実際そういうのをからかってる人とかを見るとちょっと注意したりとか、そういうことが実際あるので、今後の良い人間関係を作っていく上ですごい役に立つんじゃないかなとは思っています。(Eさん)

上記の語りのように、Eさんは第一志望の大学に合格できなかった経験を機に、他者を見下すという自己の一側面に気づき、「いろんな人に優しく接する」姿勢を持つようになった。この変化についてEさんは、「今後の良い人間関係を作っていく上ですごい役に立つ」というポジティブな意味のとらえ直しを行っている。

【同級生の受験に取り組む姿勢を見て、勉強への新たな動機づけを発見した】

このサブテーマの参加者は、第一志望を諦めざるをえなかったというネガティブな経験の中で、同級生の受験に取り組む姿勢を振り返り、「自身の勉強の動機づけが受験のためではなく、勉強自体が好きであるから」という勉強への新たな動機づけを発見した。以下、Cさんの語りの例を参照しつつ、上記の過程について考察する。

大学にそもそもあまり入りたくないと思っていて、それ以前から、病気になる以前から、そもそも大学への期待がそもそもあまりなくて。それで受験を諦めろってなったので、元々期待もしてないから、もうどうでもいいとかその時はなっていて。(中略) あと一つ大きいのが、今までは期待はしてないとはいえ、周りがしているのでその受験はしなければっていうのがあって、プレッシャーみたいなものが大きかったんですけど、諦めた瞬間にそれが全て吹っ切れて、何か自由になったというか、そういうプレッシャーから解放されたというふうな気分になりました。(Cさん)

上記の語りにおいて、Cさんは病気によって第一志望の受験を諦めざるを得なくなった。しかしCさんは、周りに合わせて勉強することのプレッシャーから解放されたという語りから、受験をネガティブにとらえつつも、「第一志望の受験を諦めざるを得なくなった」ことに対してネガティブな意味づけは見られない。その理由については下記の2つの語りから推測することができる。

私が高校3年生になる前の春休みぐらいから、受験勉強を本格的に始めたんですけども。それ以前は基本的な勉強は嫌いというか、自主的な勉強するのはほとんどしてなかったんですけど、(中略) 実際に受験勉強を始めて、これはもう宿題とかではなく、全部自分で考えて好きな勉強ができる状況になったので、以前思っていたよりも意外と勉強って面白いのかなと思うようになって。(中略) 周りの人たちは、一生懸命、自発的に勉強する人が少なくて、クラスによっては勉強ほとんどしてないみたいな人たちも結構いて。ただその人たちは、勉強は全然していないんですけどいろいろ自分の好きなこととかやって充実しているというか。それまで自分は勉強が全てというか、勉強をするのが当たり前みたいに思っていたので、別に嫌なことをさせられるくらいなら、やる意味がないと思うようになったのは、そういう人たちを見ていってもそうですし。(Cさん)

上記の語りのように、Cさんは、「勉強はしていないが自分の好きなことをやって充実してい

る」同級生と自分を比較することによって、自発的に勉強することに意味があること、そして、受験勉強は自発的に勉強ができるがゆえに、勉強を「意外と面白い」と思っていたことに気づいた。またCさんは、下記の語りのように、自身にとっての勉強の動機について振り返っている。

自分は勉強が好きだからやっているだけで、別に嫌だったらしてないというふうな。何で自分が勉強してるのかっていうふう思ったときに、大学に合格したいっていうふうな思いもちょっとあったんですけど、それよりかは面白いからやってるっていうのがやっぱり大きくて。そういう点で好きなことをするっていうふうな。嫌なことはしないっていうふうなことは、自分が勉強好きだったということと、周りで勉強嫌いな人がいたっていうふうな両方のところから得たと思っています。(Cさん)

上記の語りのように、Cさんは「自発的に勉強のできる受験勉強が意外と好きであった」という気づきを参照しつつ、受験に対して、「大学に合格したいかではなく、自分が勉強を面白いと思っていたから受験勉強をしていた」というポジティブなとらえ直しを行っている。

上記のCさんの3つの語りを総括する。Cさんは、大学に入る明確な動機づけもなく、「周りがしているのでその受験はしなければ」といったように、受験についてプレッシャーを感じていたことから、受験そのものについては、ネガティブな出来事としてとらえていると考えられる。しかし、Cさんは受験勉強の過程で、「勉強はしていないがいろいろ自分の好きなことをやって充実している」同級生との比較を行い、自身がなぜ勉強をしているかという価値観の問い直しを行った。その結果としてCさんは、「全部自分で考えて好きな勉強ができる」受験勉強が、「意外と面白く、好きなものである」と気づいた。そしてCさんはその気づきを参照しつつ、「大学に合格したいかではなく、自分が勉強を面白いと思っていたから受験勉強をしていた」というポジティブなとらえ直しを行った。このプロセスこそが、Cさんが大学受験の経験をポジティブに意味づけることにつながったと考えられる。

総合考察

本研究の目的は、特定のネガティブなイベントとその文脈を考慮しつつ、意味づけや自己成長に結びつけていくという一連のプロセスについて、BFの概念を用いて明らかにすることであった。本研究では、この目的を達成するため、大学生の中でも、大学受験をネガティブにとらえていると推測される、第一志望に合格できなかった大学生に着目し、彼らのBFを質的に検討した。

研究1では、現時点で大学受験を肯定的にとらえている大学生は、大学受験を通して肯定的な気づきを得ていることを確認した。研究1では、①大学受験のとらえ方は4群に分かれる。②4群のうち現時点で大学受験を肯定的にとらえている群は、大学受験を通して気づきを得ている、という2つの仮説を立てた。仮説①については、クラスター分析の結果、わりきり態度が高いため、大学受験

をわりきってとらえている“わりきり群”，「否定的態度」が最も高く，「否定的認識」も高いが，「連続的なとらえ」と「受容的態度」も高いため，大学受験を否定的にも肯定的にもとらえている“否定・肯定群”，「連続的なとらえ」と「受容的態度」が高いため，大学受験を肯定的にとらえている“肯定群”の3群となったことから，仮説は支持されなかった。また，大学受験のとらえ方における“わりきり群”，“否定・肯定群”，“肯定群”を対象に，大学受験を通して気づきがあるかどうかについてカイ二乗検定で分析した結果，有意な偏りが見られた。さらに，残差分析を行った結果，大学受験を肯定的・受容的にとらえている“肯定群”に加え，大学受験を否定的にも肯定的にもとらえている“否定・肯定群”も，大学受験を通して肯定的な気づきを得ていることが分かった。したがって，研究1の②の仮説は支持された。

続いて研究2では，BFの定義「過去のネガティブな経験を再評価し，その経験にポジティブかつ，新しい意味づけを行うこと」に合致する面接対象者として，研究1で「気づきがある」と回答した“否定・肯定群”と“肯定群”の中で，第一志望の大学・学部に進学できなかった大学生を対象とし，大学受験で得た気づきについての半構造面接を行った。そして，半構造化面接の語りをもとに，テーマ分析 (Braun & Clarke, 2006)を行った。研究2では，第一志望の大学・学部に進学できなかった大学生が行ったBFについての先行研究は存在しないため，探索的な検討となったが，先行研究 (Watanabe, 2017) では，教育的なネガティブイベントと，「自己の成長に対するポジティブな意味の付与」「他者の温かさの認識」という2つのBFとの関連が明らかとなっている。そのため，大学受験における失敗という教育的なネガティブイベントを扱う本研究においても，同様のBFがテーマとして抽出されると予測した。その結果，大学受験という特定のイベントの文脈性を考慮したことで，先行研究と比較して，参加者がネガティブな出来事をポジティブな意味づけや自己成長に結びつけていく，より詳細なプロセスが明らかになった。

具体的には，大学受験をポジティブに意味づけるプロセスとして，まず，第一志望に入学することができなかった参加者は，先生や親といった年長者からのサポートや，友人や恋人といった同年代の受験経験と自身の受験経験の比較といったように，受験時における身近な他者との関わりについて振り返った。次に，その身近な他者との関わりを通して，受験を乗り越えた経験や，受験において自身の努力が足りなかった経験といった，自身の受験経験に対する総括を行った。そして最後に，自身の受験経験に対する総括をもとに，「自己成長を促す力の獲得」や「新たな視点を獲得」といった受験経験に対してポジティブかつ新しい意味づけを行っていた。

このように，本研究では，第一志望に合格できなかった大学生に着目することで，ネガティブなイベントの文脈性を考慮しつつ，彼らがポジティブな気づきを得るまでに，ネガティブな出来事の中でどのような経験を参照しているのか，そしてその経験をもとにどのような類のBFを行っているのかというBFの詳細なプロセスを明らかにした。

本研究の意義

本研究で得られた知見は，BFという概念の発展という側面において，第一志望に合格できなかった大学生のBFのみを扱ったことから，限定的なものであると考えられる。しかし本研究では，大学

受験という特定のイベントに着目したことにより、【先生や親の情動的なサポートを経て受験を乗り越え、実用的なスキルを獲得した】など、先行研究にはない新たなBFが明らかになった。このことから、本研究の知見は、今後のBF研究において、BFのプロセスをより詳細に明らかにするためにネガティブなイベントとその文脈を考慮する必要性を示唆するものであった。

また、本研究で得られた知見は、第一志望ではない大学に不本意入学した大学生の、受験経験の肯定的な意味づけを促進する教育的・臨床的支援に活用できると考えられる。大学への不適応感が春から秋に向けて生じる大学生は、受験の失敗に対する思いが再燃し、自身の理想とする大学像とのギャップや授業内容、カリキュラムに対する不満が高まるとされる(佐藤他, 2016)。本研究の知見は、支援者が不本意入学をした大学生の受験の失敗に対する思いを緩和し、適応的な大学生活を送るうえで有用な意味づけを行う支援を提供するための指針となる。

本研究の限界と今後の展望

最後に、本研究の限界点と課題を挙げる。第1に、本研究の面接対象者について述べる。本研究では、第一志望に入学できなかった大学生でも、クラスター分析において“わりきり群”に分類された参加者や、気づきが「ない」と答えた参加者は、面接対象者から除外した。したがって、第一志望に入学できなかった大学生の中でも、BFを得た参加者とBFを得なかった参加者を比較することは不可能であった。今後は、第一志望に入学できなかった大学生がBFを得る方法についてより詳細な知見を得るために、第一志望に入学できなかった大学生全員を面接対象者とする必要がある。また、本研究で対象とした参加者は、教育水準が比較的高く、競争率の高い大学入試を経験した教育系の学生である。事情により大学に進学できなかった者や、理系などの他学部に進学した者に対する本研究の知見の適応可能性は不明であるため、今後面接対象者を拡大する必要がある。

第2に、本研究の研究2で得られた他者とのエピソードについて述べる。本研究では、第一志望に入学できなかった大学生がBFを得る話りのプロセスでの他者とのエピソードについて、詳細な検討をすることができなかった。本研究において、第一志望に入学できなかった大学生がBFを得る話りのプロセスで、先生や親といった年長の他者と、友人や恋人、クラスメイトといった同年代の他者とのエピソードを振り返った。本研究では、＜先生、親といった年長者のサポートを経て、自己成長を促す力を獲得した＞＜同級生の受験経験と自身の受験経験を比較して、新たな視点を獲得した＞という2つのテーマが抽出された。この2つのテーマから、他者が第一志望に入学できなかった大学生とどのような間柄にあるかによって、振り返るエピソードのカテゴリが異なること、そして、他者とのエピソードを振り返った後、得られるBFの質が異なることが示唆された。また、研究2で得られた主テーマ＜先生、親といった年長者のサポートを経て、自己成長を促す力を獲得した＞のサブテーマ間には、ソーシャルサポートの質的な違いが存在した。具体的には、【先生や親のサポートを受けつつ受験を乗り越え、精神的な忍耐力を獲得した】では、情緒的なサポートと情動的なサポート(Cronenwett, 1985)、【先生や親の情動的なサポートを経て受験を乗り越え、実用的なスキルを獲得した】では情報的なサポートというサポートの質的な違いが認められた。このように、第一志望に入学できなかった大学生のBFのカテゴリには、BFを得るプロセスで振り返る

受験のエピソードに登場する他者の種類, その他者とのエピソードの種類, 他者から受けたソーシャルサポートの種類の影響が示唆された。これらの差異を量的に検討することで, 第一志望に入学できなかった大学生のBFのプロセスをより詳細に理解することが可能となると考えられる。

謝 辞

本論文の完成にあたり, 沢山の方々のご協力をいただきました。雑賀智子氏を中心とした広島大学発達研究室の皆様には, 的確な助言やサポートをいただきましたことを, 誠に感謝いたします。さらに, 副指導教員の石田弓先生と三時眞貴子先生, 梅村比丘先生, 関西大学文学部総合人文学科教授の菅村玄二先生には, お力添えを賜りありがとうございます。最後に, 本研究のために快く調査にご協力いただいた皆様と, 貴重な語りを提供して下さった皆様に, 心から感謝申し上げます。

引用文献

- ベネッセ教育総合研究所 (2012). 大学生が振り返る大学受験調査 [2012 年] ベネッセ教育総合研究所 Retrieved January 29, 2023 from https://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/daigaku_jyukun/2012/pdf/data_02.pdf
- ベネッセ教育総合研究所 (2021). 第 4 回 大学生の学習・生活実態調査報告書 データ集 [2021 年] ベネッセ教育総合研究所 Retrieved January 29, 2023 from https://berd.benesse.jp/up_images/research/4_daigaku_chousa_p6-12.pdf
- Berntsen, D., & Rubin, D. C. (2006). The centrality of event scale: A measure of integrating a trauma into one's identity and its relation to post-traumatic stress disorder symptoms. *Behavior Research and Therapy*, 44(2), 219–231. <https://dx.doi.org/10.1016/j.brat.2005.01.009>
- Braun, V., & Clarke, V. (2006). Using thematic analysis in psychology. *Qualitative research in psychology*, 3(2), 77-101. <https://dx.doi.org/10.1191/1478088706qp063oa>
- 千葉 理恵・宮本 有紀・船越 明子 (2010). 精神疾患をもつ人におけるベネフィット・ファインディングの特性 日本看護科学会誌, 30(3), 32-40. https://doi.org/10.5630/jans.30.3_32
- 千島 雄太・水野 雅之 (2015). 入学前の大学生活への期待と入学後の現実が大学適応に及ぼす影響 — 文系学部の新入生を対象として — 教育心理学研究, 63(3), 228-241. <https://doi.org/10.5926/jjep.63.228>
- Cronenwett, L. R. (1985). Parental network structure and perceived support after birth of first child. *Nursing Research*, 34(6), 347–352. <https://doi.org/10.1097/00006199-198511000-00007>
- 藤村 まこと (2014). 成功経験と失敗経験の振り返りが自信と努力量に及ぼす影響 福岡女子大学紀要, 15, 81-87.
- Gao, H., Zhang, Y., Wang, F., Xu, Y., Hong, Y.Y., & Jiang, J. (2014). Regret causes ego-depletion and finding

- benefits in the regrettable events alleviates ego-depletion. *The Journal of General Psychology*, 141(3), 169-206. <https://dx.doi.org/10.1080/00221309.2014.884053>
- Habermas, T., & Bluck, S. (2000). Getting a life: the emergence of the life story in adolescence. *Psychological bulletin*, 126(5), 748-769. <https://doi.org/10.1037/0033-2909.126.5.748>
- 堀田 亮・杉江 征 (2013). 挫折経験の意味づけが自己概念の変容に与える影響 心理学研究, 84 (4) , 408-418. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.84.408>
- 堀井 順平 (2017). 大学受験のとらえ方およびコーピングの組み合わせによる自己効力感の差異— 特性的自己効力感とキャリア選択自己効力感に着目して— 発達心理学研究, 28(4), 233-243. <https://doi.org/10.11201/jjdp.28.233>
- 堀井 順平 (2019). 個人属性と大学受験期の努力の程度による大学受験のとらえ方の違い 広島大学 大学院教育学研究科紀要, 68(1), 41-48. <http://doi.org/10.15027/48458>
- 松下 智子 (2008). ネガティブな経験の意味づけ方の変化過程—肯定的な意味づけに注目して— 心理学研究, 9, 101-110. <https://doi.org/10.15017/15718>
- McAdams, D. P., & McLean, K. C. (2013). Narrative Identity. *Current Directions in Psychological Science*, 22(3), 233–238. <https://doi.org/10.1177/0963721413475622>
- 文部科学省 (2021). 令和3年度学校基本調査(確定値)の公表について 文部科学省 Retrieved January 29, 2023 from https://www.mext.go.jp/content/20211222-mxt_chousa01-000019664-1.pdf
- 櫻井 信也 (2009). 再受験を考える学生とのカウンセリング 早稲田大学大学院教育学研究科紀要, 20, 71-84.
- 佐藤 進・鈴木 貴士・川尻 達也・山口 真史 (2015). 入学時に大学に対する不本意感および学業へのつまずき感を有する学生の特徴 KIT Progress—工学教育研究, 24, 53-62.
- Tedeschi, R. G., & Calhoun, L. G. (1996). The Posttraumatic Growth Inventory: Measuring the positive legacy of trauma. *Journal of Traumatic Stress*, 9(3), 455–472. <https://dx.doi.org/10.1007/BF02103658>
- Tennen, H., & Affleck, G. (2002). Benefit-Finding and Benefit-Reminding. In Snyder, C. R & Lopez, S. J (Eds.), *Handbook of positive psychology* (pp.584-597). Oxford university press.
- Watanabe, H. (2017). The mediating effects of benefit finding on the relationship between the identity centrality of negative stressful events and identity achievement. *Identity*, 17, 13-24. <https://doi.org/10.1080/15283488.2016.1268536>
- 渡邊 ひとみ (2020). 青年期のアイデンティティ発達とネガティブ及びポジティブ経験に見出す肯定的意味 心理学研究, 91(2), 105-115. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.91.19010>
- 山根 隆宏 (2014). Benefit finding が発達障害児・者の母親の心理的ストレス反応に与える効果 心理学研究, 85(4), 335-344. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.85.13053>